

橋爪清四郎氏 が家族にあてた手紙

家内一同へ  
 萬歳高ラカキ  
 最后ヲ遂ゲシげシ  
 父ノ名譽ヲケヲケ  
 ガサヌ様立派ナリ  
 國民トナリ  
 ノ為ニ働ケケ  
 其ノ為ニハ身體  
 ノ強固ニ努メ良ク  
 母ノ命令ニ従リテ孝  
 養ヲ盡セ  
 其レガ父ノ最后ノ  
 言葉デアル 良ク守レ  
 父ヨリ

家内一同へ

萬歳高ラカキ

最后ヲ遂げシ

父ノ名譽ヲケガサヌ様 立派ナル

國民トナリ み國

ノ為ニ働ケ

其ノ為ニハ身體

ノ強固ニ努メ良ク

母ノ命令ニ従リテ孝

養ヲ盡セ

其レガ父ノ最后ノ

言葉デアル 良ク守レ

父ヨリ

手紙を書いた橋爪清四郎氏の息子 橋爪清咲氏の記憶

父は大工でした(清咲も後に大工になる)。仕事現場に赤紙が届く。父は、とうとう来たか・・・と、道具を整理し乍ら、刃物などに口ウをぬって仕末注1にとりかかりました。母はその時五人の子供がいて、それはそれはまずしくて、清咲は学校へ行く時は、くつ下もなく、父の乗馬ズボンを切りくずしてはいたものでした。骨つぼの中は石が入っていて、カタカタと音がしたそうです。

代筆 下岡本町 橋爪れい子

※橋爪清四郎氏は、現飛騨市神岡町(流葉)の出身。工兵(上等兵)として沖縄に派遣され、昭和二十年六月に橋の工事中に死亡。この手紙を書き置いてから出征されたらしい。

梶家長二氏の遺言書

遺言書

一自分、家督相續人トシテ不歿郡久野村  
又字地所、下一九番地ノ二 安貞子  
梶家秀雄ヲ指定ス

二自分所有ノ財産ハ貯金 若干  
生命保険一五〇円

三神佛ヲ尊ビ父母ニ孝行シ  
祖先ノ靈ヲ慰ムルコト

秀雄及ビ明彦ヲ立派ニ立上ルコト

右 遺言ス

昭和十九年三月十日

此等縣大野郡久野村大字世野五十九  
遺言者陸軍上等兵 梶家長二

遺言狀袋

氏名  
梶家長二

## 遺言書

一、自分ノ家督相續人トシテ大野郡久々野村大字無数河六一九番地ノ二 實子

梶家秀雄ヲ指定ス

二、自分所有ノ財産ハ生命保険一、一五〇円 貯金 若干

三、神佛ヲ尊ビ父母ニ孝行シ祖先ノ靈ヲ慰メルコト

秀雄及ビ明彦ヲ立派ニ育て上ルコト

右 遺言ス

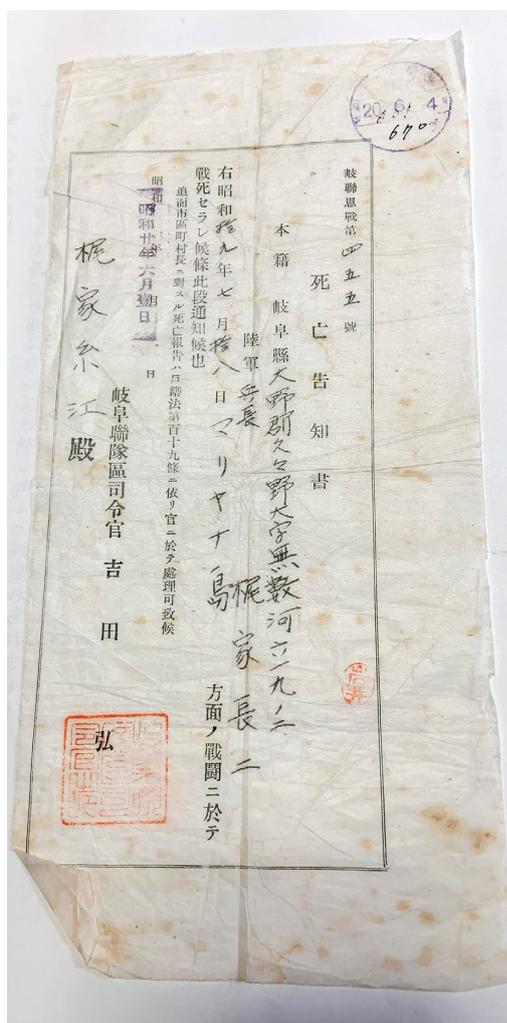
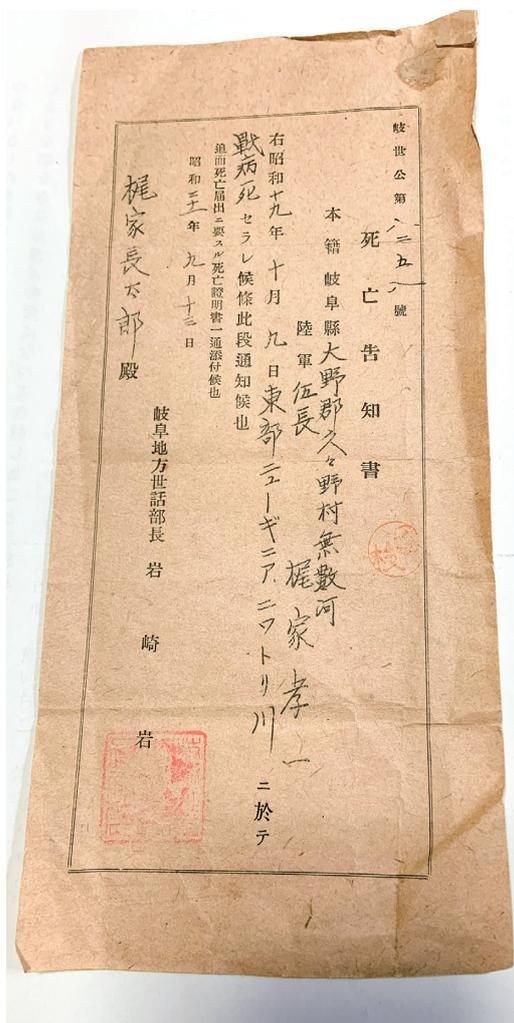
昭和十九年三月十日

岐阜県大野郡久々野村大字無数河六一九―二

遺言者 陸軍上等兵 梶家長二

※梶家家が戦後旧宅から新宅に転居する際、仏壇も新しくした。本遺言書は、仏壇の中身を移動する際に発見したものである。

# 死亡告知書



【右】

梶家長二氏 陸軍兵長

昭和19年7月18日 マリヤナ島(マリアナ島)方面で29歳で戦死

【左】

梶家孝一氏 陸軍伍長

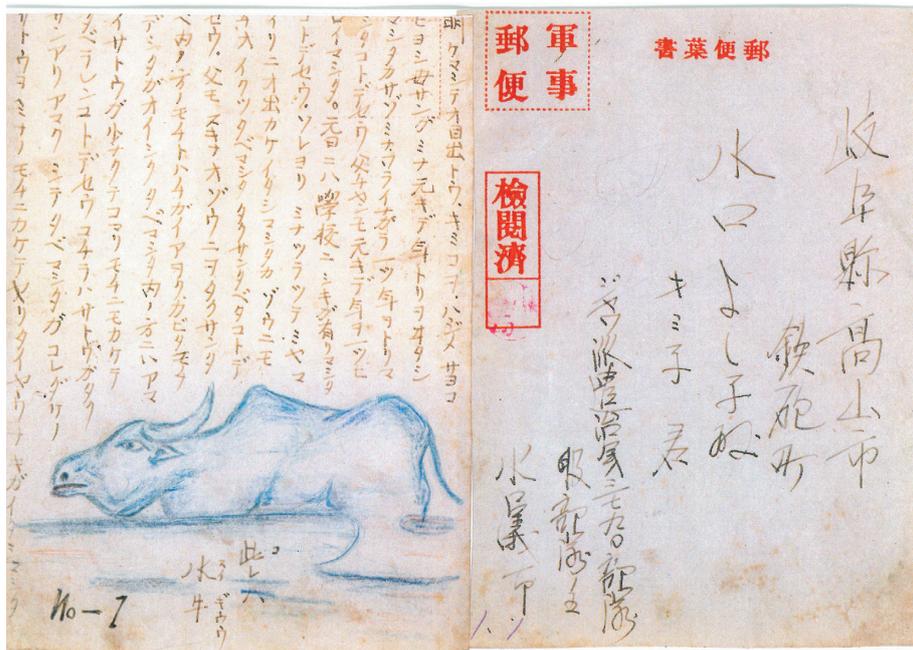
昭和19年10月9日 東部ニューギニア ニワトリ川で戦病死

※長二氏は妻宛、孝一氏は父宛になっている



「贈 梶家孝一君(長二氏の弟)」と書かれた国旗

戦地からの手紙



明けましてお目出とう、きみ子をはじめ さよこ ひよし  
 母さんが、みな元気で年とりをいたしましたか。さぞ、みな  
 わらいながら一つ年をとりましたことでしょう。父ちゃん  
 も、元気で年を一つひろいました。元日には、学校にしきが  
 有りましたことでしょう。それよりみなつらって、みやまい  
 りに、お出かけいたしましたか。ぞうに、もちをいくつたべ  
 ましたか。たくさん、たべたことでしょう。父もすきなおぞ  
 うにをたくさんたべ、内の方のもちとはちがい、あおく、か  
 びたもちでしたが、おいしくたべました。内の方には、あま  
 いさとうがすくなくて、こまり、もちにもかけてたべられん  
 ことでしょう。こちらにはさとうがたくさんあり、あまくし  
 てたべましたが、これだけの、さとうをみなのもちに、かけ  
 てやりたいようなきがいたしました。

岐阜県高山市鉄砲町 水口 よし子様 キミ子君  
 ジャワ派遣□第三七九〇部隊□部隊ノ五 水口儀一郎

上官から、瀬上賢孝氏の家族に宛てた手紙

初夏の候御尊家御一同御清栄の御事と存じます。

小生瀬上賢孝氏と同じ中隊に起居致して居りました。当時陸軍軍曹井野秀康と申す者でございます。終戦后一年四か月シベリヤで重労働をやってやっと帰国致しました。もつと早く御手紙を差し上げねばならなかったのですが、住所をすっかりソ聯にて取られてしまひ、此度やっと世話部に照合して分かりましたので早速御通知申上げます。

八月九日、日・ソ間に戦闘が開始するや、第五国境守備隊(□□六九四部隊)の我が第二中隊は直ちに裏山の陣地にたてこもり「一週間死守せよ」との命を受けました。時に小生第一小隊の第一分隊長を命ぜられ部下七名と共に生死を誓って突角陣地<sup>注2</sup>を防備致しました。吾が分隊中で一番若くして勇敢に活躍してくれた瀬上賢孝氏を自分が御預りして居りました。

八月十二日夕刻に到り、敵は機械化部隊と共に怒濤の如く攻め寄せて来ました。吾が軍は、不完全極まりなき人員と設備とで最善を盡して応戦致しました。すると、其の日

の十二時頃に敵は沈黙状態になり、後で考へると其の間に迫撃銃、連射銃を吾が陣前にこっそり並べたのです。しかし吾が軍には火銃等は一つもなく如何んともすべがありませんでした。

それ迄は一名の損害もなく一時休戦状態になりましたが、一夜更けて十三日の朝五時を期して再び戦闘が開かれ、吾が軍は小銃弾一発を敵に撃ち込んだ丈けでそれに対する見舞弾がもの凄く、迫撃銃と連射銃とでさんざんに撃ちのめされてしまひましたが、小銃丈では手も足も出せなくなつてしまひました。

吾々の一米四方に敵の迫撃銃弾が落下して本当に身動きも出来ない状態がしばし。突然小生の隣の壕に入って居った瀬上賢孝氏の處に銃弾が命中、実に壮烈極まりなき戦死を遂げられました。命中後如何にと見ると瀬上氏は相当苦しさうでしたが、もう駄目だと思はれたか、今の今迄張切つて御国の為とひたすらに活躍して居られた瀬上賢孝氏が天皇陛下万歳とはっきりと一度唱へて護国の鬼となられたのです。

嗚呼なんたる壮烈極まりなき戦死でせう。深く深く感謝の意を表すると共に、御冥福を御祈り申上げます。

八月十五日終戦となるや小生等、オメオメと生き長らへ、九月十日ソ聯領へ入れられ

てしまひました。

八月の二十日に戦場整理のため小生等二十名にて戦場に行き中隊長以下百五十名の戦友の屍を葬って参りました。遺品を少々宛持って来たのですがソ領内にて全部引き上げられてしまひ実に残念です。敗戦国のみじめさを体得しながら悪運強いと言ひますか、今日迄生きのびてしまひました。小生の小心を御笑ひ下さい。瀬上賢孝氏に何と詫びて良いのか、実になさけなく思つて居ります。

大変長々と乱筆乱文をつらね、失礼致しました。御通知して是か非か迷ひましたが、小生の決心に依つて御通知申し上げた次第です。

以上は實際ありのまゝを記しました。御氣に御障りの点がございましたら幾重にも御詫申上げます。

終りに瀬上賢孝氏の御冥福を御祈りいたしますと共に、皆々様の御健康を御祈り致します。

不備

六月三十日

井野 秀康

瀬上  
新蔵  
様



瀬上賢孝氏

## 家族の無念と失意

神奈川県川崎市 松井 嵯峨

私は両親と兄と女三人の六人家族でした。両親が結婚後、父は片倉製糸株式会社に勤務していて、佐賀県を振り出しに、兵庫県、広島県、東京府と転勤でした。兄は小学校を四回転校しました。私は運よく東京府下にて旧制女子専門学校を卒業するまで住んでいました。妹たちは戦時中疎開やら転校を余儀なくさせられました。ただ一人の兄茂は父の希望の星で、その成長は日々の楽しみでした。然し兄は転校の度に方言の違いからいじめにあい成績も振るわず希望する府立中学校に合格できませんでした。私立中学の方法もあったでしょうが公立を希望した父の要望で、斐太中学に入学させて、高山の母の実家に寄宿させました。五年間の単身の学業生活は身体的に精神的にそれなりの苦勞があったと、母や私は考えていました。休暇に帰った兄の状態から推測しました。幼児期より機械が好きで、なんでも分解して私の人形も壊されました。斐太中学時代に校長から陸海軍の学校へ進学を勧められました。当時は割り当てだったようで父は一人息子

であり他の道でお国のために役立たせたいと断りました。洗脳を受けていたので気に入らぬようで、私に兵役に就きたいから後は頼んだぞ、と言っていました。甲種合格注3の時にも近く令状が来るだろうと言われて父は万一に備えて、新刀武蔵太郎と古刀備前の国住人長船兼光の二振りを求めて準備をしていました。兄は新刀を馬鹿にして下駄ばきで人形を切りました、運悪く足の親指を二つに切り大変な目にあい休んでいました。

父は壯年期注4に医者注4の誤診で虫垂炎を大腸炎として膿が腹中にまわり危篤状態となり、為にその後何年も入退院を繰り返し我が家は暗雲を垂れていました。私たちは危うく里子にでも出されるところでした。そこから兄を医者にと熱望していたのですが、精密機械の道を選び、山梨高等工業専門学校に入学しました。昭和十九年でした。戦局は激しく、兄も理工科ながら兵役の気配です。父はすかさず兵役延期願を出し受理されたのでしたが、兄は父を非国民呼ばわりしていましたが、栄養失調から肺浸潤注5になり半年の療養をすることになり、六年ぶりに家庭生活を楽しんでいました。私も子供のころは遊び相手注5で相撲をしたりかけっこをしたり、川に泳ぎに、ハーモニカを習いなどと仲良く、優しい兄が大好きで軍歌など歌いました。都立第四高女に通学している私は数学が苦手、兄がわかるように教えてくれました。私も立川の飛行場に学徒動員でした。当時、

福生の家は飛行場に近く毎夜サーチライトに照らされて危険でした。父はこのままでは、一家全滅を心配して兄に学校へ様子を見に行けと命じ、兄は七月二日しぶしぶと私に八王子駅まで見送られて中央線に乗り込み満員の車中の人となりましたが、見失ってしまった。残念な思いをした私でした。

兄は翌日担任教授に会いました。学生は動員中故ゆっくり期限まで静養しなさいと言われて、父に報告、七月七日の朝帰る切符を手にしました。七月六日の夜、空襲警報が響き、甲府をB29が襲いました。母は懸命に般若心経を唱えています。無事でいてくれと……

翌日私は八王子駅で兄の手荷物を目にしました。家に帰り、母に報告しているところへ兄と同じ制服の学生が訪れたのです。悪い予感でした。違わず教授の命令を持ち松井茂君は昨夜の空襲で即死されました。両親と私の三人は号泣でした。直ぐおにぎりを持ち父の軍用の証明書で切符を入手して満員というよりもぶら下がる人、人の中央線で甲府に行き焼野原を教授の家に行き一部始終を聞き学校の体育館に安置された四人の遺体に合掌して兄の死に顔に對面しました。蠟人形のように美しく凜々しい兄の顔を見て、何故こんな事になったのかと、また号泣でした。焼夷弾六十本を纏めている重しが

空中を舞い、それが腰にあたり即死との事でした。二十キロ位の物でした。父は学資金を沢山与えていましたが多分体に巻き付けていたのでしょう。見ることはありませんでした。隣組の協力で葬儀を終えて、三人は死んだようでした。母と每晚読経して冥福を祈りました。

終戦となり私は旧制女子専門学校に入学し、卒業と同時に、飛驒弁の全く判らぬ、吉城高校に勤務して、養子を迎え男児二人を育てて、独立させて三十年の勤務をして退職しました。その後父の仕事を引き継ぎました。息子たちは大学に関係して後継ぎがないのでやめました。兄が亡くなり、戦争により大きな無念と失意の元、私の人生は百八十八度転換したのです。恋も愛も知らず、やりたいこともやれずの兄を八十年間思わぬ日はありません。この様な方は沢山みえるのです。内地の攻撃が始まった時、否戦争をしなければ日本はどんな国になっていたのでしょうか。今や第三次世界大戦にならなければよいがといった空気を感じています。戦争だけは絶対にやめてほしいと切に願うものです。こうした不幸な出来事を後世に伝えたいと願うものです。

以上

## 平和への思い

高山市上宝町蔵柱 西本 孝司

母は七人兄弟の末っ子で四女、本来ならば成人すればどこかへ嫁いでいく立場であったと思います。

ところが一歳前後で四人が次々と病気で亡くなり、跡継ぎ予定の長男が戦死し、長姉はすでに他家へ嫁いでいたため、終戦時十六歳の母が急遽家を継ぐ立場となりました。若くして父を婿養子に迎え私が誕生しました。その父も昭和二十年には兵隊検査を受け、その年の十月には海軍に入隊することになっていたようで、戦争がもう少し長引けば生きては帰れなかったとよく言っていました。そうなれば当然私も生まれていないわけですので、人生は運命次第でどう変わるかわからないものだとつくづく思います。

伯父である公守は、昭和十七年に現役兵として出征し、最初は支那方面へ派遣されていたようで、戦地から二度の手紙と写真が送られてきておりました。二度目には「不動

様の祭りには**糶入れ**<sup>注6</sup>が済んだ様子、もう今頃は、二、三部位伸びている事でしょう」とありました。多分その前に家からの便りがちゃんと届いていたのだと思います。不動様とは黒谷不動の例祭のことだと思いますが、今でも三月二十八日に行われている地元の行事です。

ただ、最後に「今後都合により小生よりお便り致しますまで、発信下さらぬようお願いいたします」とありました。母は、よく**秘密動員**<sup>注7</sup>で召集されたので、所属部隊やどこにいるということは人に語らないように言われていたことを話してくれました。一度目の便りには、「家族や周りの景色など写真があれば何でも送って下さい」とあったので、そのころから戦況が厳しくなりつつあったということが窺えます。

その後はフィリピンのレイテ島に転戦、オルモックにて敵砲弾により戦死と記録されています。後から聞くと大変な激戦地で生還者はほとんどいない所だそうです。小さな島で逃げる所もなく命を落としたことを思うと、苦しかっただろうなと本当につらい気持ちになります。

祖母は長男の出征後、毎日神社に花と水を供え無事を祈願していたそうです。このこ

とは隣家の姉さんが五、六歳位の時神社で縁の下のべべ注8コを掘って遊んでいたときによく見たと話してくれました。

終戦になってからも音沙汰がなく、役場を通じて戦死公報が届いたのはずっと後で紙切れが入っていただけだったそうです。祖母はその後心労であえなく亡くなってしまいました。

私が初めて戦争を感じたのは、昭和三十年代でまだ小学生だった頃、盆になると戦死者の家を婦人会の皆さんが連れ立って墓参りに来て下さったことです。沢山の方が花やお供えを持って毎年来て下さいました。どうして家の墓だけ皆が参ってくれるのかなと思っていました。その行事も月日の経過とともになくなりりましたが、地域の皆が戦没者を偲び追悼する気持ちを持ち続けていたんだなあと思います。

先日新聞に戦争体験者の思いとしての特集が組んであり読みました。戦争犠牲者を追悼する心情と共に、「今は便利で快適な生活を送れるようになり苦労もなく幸せなことだと思っています」との感想のあと、控えめに「ただ世の中が違って人に対する思いやりや優しさが昔はもっとあったように思います」と二人の方が共通して述べてみえたのに

は心に響きました。

戦争を繰り返してはならないことは言うまでもありませんが、周りの人を大切に  
世の中になっていけばいいなと思います。

## 私の満州

下島 智恵子

国策で一九四〇年九月ロシア、朝鮮、満州と三国の国境に近い朝日開拓団へ、私は六歳で両親と妹と四人で集団入植した。開拓と言っても原住民の土地を安く買い上げた土地で、開拓などしなくてもよく、天候で不作の年もあったが、野菜などは肥料もやらなくても良く出来た。米、大豆などもでき供出もできるようになり、一年毎に入植者も増え開拓団らしくなって活気に満ちていた。

一九四五年八月九日ロシアが不可侵条約を破って侵入して来るから避難するように突然命令がでて早速牛車で団を後にするが、途中の橋は日本軍が焼き落として通れなく小さな渡し船で川越えをし、何とか琿春の駅までたどり着き汽車に乗った。途中空爆にあい豆畑に隠れ、近くまで弾が飛んで来て怖かった。苦勞してやっと目的地の関東まで避難して来た。避難所は学校の二階だった。

方々から避難して来るので遅く来た人達は床下にまで入った。食べ物も少なく、コー

リヤンのおかゆが一日二回だった。そうこうしているうちに八月十五日の終戦になり、満州人の暴動、ロシア軍の侵入、ロシア軍の戦車、トラックが昼夜轟轟と音をたてて入って来た。二、三日するとロシア兵が鉄砲を持って万年筆や時計を出せと言って天井に向けて発砲するのです。食料も無くこんな日が続いた。九月になって琿春へ帰ることになり野宿をしながら歩き始めた。琿春までは百二十キロもあり、途中密江峠では戦争の跡があり兵隊さんがあちこちで沢山亡くなっていたり、馬が死んでいた。地雷を踏んで怪我をする人、山の中でお産をする人、それはそれは大変な十二日間だった。野宿をしながら老人から赤ちゃんまで腹を空かせて琿春までたどり着きました。開拓団まで帰れると思ったが、帰ることも出来ず琿春で過ごすこととなり、満州は九月になると寒くなり薪も無く、食料も無い生活が始まった。飢えと病気で毎日亡くなる人が増えていく。ロシア兵の女狩りもありそれは大変で、女性は頭を丸めて顔に炭を塗ってごまかしていた。元気な者は炭鉱に行くことになり、私たち一家は炭鉱へ行った。食べ物も無く病魔はどこへ行っても同じでバタバタと亡くなる人が増え、下の谷は亡くなった人の山ができた。乞食に行ったり、食べられるものは何でも拾って食べた。十一月になって団長さんの訃報が入り団員皆で悲しみ力を落とした。炭鉱は山の上だから水汲みに苦勞した。

下の発電所の貯水池まで汲みに行った。冬になって貯水池が凍り子供の私には大変だった。一斗缶を半分にして天秤棒で担ぎ、長い山道を登って住家まで運んだ。坑内へ入る人も大変だった。少ない食料で手掘りをしてどんなに辛かっただろうと思う。

配給も少なく食べるものも無くなって、父と一回、母と二回下の部落まで乞食に行った。広い飛行場があってそこを通り部落までは遠くて大変だった。満州の人はやさしくて少しずつですが大豆、トウモロコシなどを下さった。父も坑内に行っていたのだが、そんな時母と二人一緒に寝込んでしまった。母は動けなくなり、下の世話は缶に石炭の灰を入れて済ませた。食べ物は大豆をやわらかく煮て食べさせた。自家用の石炭拾い、水汲み、看病と五年生の私にはとても辛いことだった。その頃の気温はマイナス三十度くらいになったが良く頑張った。

父と母がようやく良くなって動けるようになったら、私と妹が病気になってしまった。「リンゴが食べたい。梅がほしい」と言って、やんちゃを言う私を母が、「内地へ行ったら食べさせてやるから早く良くなって」と言って看病をしてくれた。おかげさまで妹も私も元気になって一家四人医者にもかからず元気になれて良かった。ようやく春になって此処にいては駄目だから下へ降りようということになって、琿春の街まで下りて

きた。母と妹は親戚で世話になる事となり、父は満人の農家へ住み込みで行き、私は父の近くの満人の家へ預けられた。満人の家では良くしてもらった。初めは言葉を覚えるのに苦労したが、帰るころには日常の言葉は話せるようになっていた。八月三十一日に父が日本へ帰れるようになったと言って迎えに来てくれた。南部の朝子ちゃんを満人の家に預けてあったので、おばちゃんと一緒に行って連れて帰ってきた。四月から八月まで満人の家に預けられてようやく夢にまで見た日本へ帰れるのと、両親の元へ帰れるのが何より嬉しかった。

## 引揚げ

下島 智恵子

満人の家から父に連れられて琿春へ帰ってみると、広場に焚火を焚いて会えて喜んで  
いる者、肉親を亡くして悲しんでいる者、悲喜こもごもでした。我が家はおかげさまで  
一人も欠ける事無く元気でしたが、母の実家の谷口は九人も亡くなり、次男の清一人が  
残り私たち一家と帰る事になりました。

清は十一歳でした。荷物をまとめ昨年通った密江峠を反対方向に越え、今度は図們峠  
と二つの峠を越えることになり、英安炭鉱の下と乞食に行った時に通った飛行場を通り  
ました。マイナス三十度と強風の中を歩いて乞食に行った苦しさより、これまで生き残  
れたことを嘯みしめて通過する。

一日目は天気良かったが二日目から雨になり、野宿をしながら三日間歩きました。  
図們峠も雨で道はぬかるみ、寒さも加わり子供には大変でした。駅に着けば濡れた体の  
ままで貨物車に乗り、歩き疲れて濡れた体のままで私も清も妹も眠りました。走り出し

たらなかなか止まらな  
いと思っ  
たらすぐ動き出す、不規則な列車でトイレが一番大変でした。途中鉄道が爆破されていて松花江は小さな舟で渡りました。

また無蓋車注9に乗り、男の人が外で、荷物と女子供は中に乗り振り落とされないようにしました。

私たちの乗った貨物車で三部落のおばさんが激しい下痢におそわれコレラの疑いをもたれて薬によって死亡させられ、娘さんがおぶって線路の外へおいて行かれる。一人でも病人が出たら一個団体が帰れなくなるからこういう犠牲者が出るのです。

吉林の収容所に着く。ここから検疫注10が始まってシラミの駆除でDDT注11を頭から荷物まで真っ白になりました。ここの収容所でも一週間位足止めさせられ、再び無蓋車に乗って長春の収容所へ行きました。ここでも検便、予防注射、DDTの散布がある。収容所には水が無く何千人も居るのに井戸が二か所ぐらいしか無く、私たち子供三人で弁当、やかんを持って並び水を汲みました。トイレも大変で地面に溝を深く掘り、その上に板を渡した野天便所で怖かったです。どこの収容所も同じで食べ物はコウリヤン注12のおかゆか、コウリヤンのにぎり飯で一日二回でした。

今度は錦州と云う収容所で今までは野宿でしたが、ここでは小さい空き家に大勢詰め

込まれてぎゅうぎゅうでした。ここでも検疫がありました。あれだけシラミで苦勞しましたがどうにかシラミは大分いなくなってDDTに感謝です。ここでは外出が許されませんが腹が減っていてあまり遠出はしなかったです。

母が私に「ちよっとおいで」と言われるので後に着いて行くと、河の土手のようなところに座らせて、サツマイモを二個食べようと言ってくれました。その時「文枝(妹)も、もらった子だが、お前ももらった子だ」と言われたが、サツマイモの美味かった事は覚えていますが、後のことの感情は覚えていません。母も栄養不足と疲れで少し体を悪くしていましたが、父の手厚い看病で良くなって帰国出来ました。しかし昭和二十五年九月、急に亡くなりました。

検疫も終わりようやく満州最後のコロ島行の命令が出て、また無蓋車に乗ってコロ島に着きました。中々順番が来ず夕方になってようやく乗船できました。アメリカの貨物船でした。船の中も一日二食で雑穀の八分粥のような食事で、いつも腹をすかしてました。船の中で人が亡くなると船尾から海の中へ投げ入れました。ここまで来たのにと悲しくなりました。「日本が見えるぞー」と言う声で甲板に上って大人の人たちと一緒に喜びました。

船の中でも検疫があって博多へ入港しましたが、十四日目に上陸して松原寮で一泊しました。翌日博多駅から岐阜行きの汽車に乗車。各務原の宿泊所で一泊して久々野駅着。久々野駅で迎えのトラックに乗って朝日村へ着くと、小学校の講堂に昼食が用意されていて、一年二か月前の避難から食べられなかった白いご飯と味噌汁の味は、終生忘れることはありません。村の方々からの歓迎を後に、一緒に帰国した皆さんと別れてまたトラックに乗りなつかしい古里へ向かいました。そして父の実家にお世話になりました。

残留孤児注<sup>13</sup>にもならず、また他の団のように自決も無く、性の提供も無く、この大勢の団員を困難の中で連れ帰って下さった中島先生、下島さん、中谷さん、村瀬さん、私たちをお世話下さった方々に感謝申し上げます。

筆者 昭和九年十二月生まれ 旧朝日村(秋神)にて誕生

渡満 昭和十五年九月(五歳) 帰国 昭和二十一年十月(十一歳)

五歳からの記憶を思い出しながら執筆させていただきました。

## 私にできること

一之宮遺族会 岩畑 正義

私は「さきの大戦」と表現する理由を知らなかった。祖父は支那事変・大東亜戦争と言っていた。それ以外は口にしなかった。祖母と母も「あなたの父は戦死した」のみで多くを語らなかった。知らされず、知ろうともせず私は生きてきた。

さて、正月三日の中京テレビ（日テレ系）のニュースエブライに目を引かれた。

テーマ「いまを 戦前にさせない」である。

「『いまを戦前にさせない』ために報道の仕事にたずさわる私たちが今やるべき事は何か。戦争体験者に取材を続けると同時に、戦争の予兆を毅然として見逃さない。八十年前、事実を隠し戦争をおおりに立てたメディアの罪もよく心に刻んで、伝えるべき事、残すべき映像を、力の限り発信していきたいと考えます」

日本テレビ報道局長伊佐治健氏のコメント（2024.12.9）の末尾を引用した。

先の大戦の理由を知るにはスマホが簡単に教える時代になったがその答えは私の心に

残らない。しかし、このテレビ放送は私に訴えてきた。

国は、今も「さきの大戦の総括」をしていない。学校でも教えない。おそらく今後もしないであろう。事実、事実、真実は真実であり、必ず存在する。

では、私に何ができるのか、何を伝えるのか。何もせずに生きてきた私にこの報道番組が与えたのはこれだ。

世にあふれる情報に目をそむけず、受けとめ、少しでも正確に理解できるように努力することでないかと……。健康なかぎり……

## 戦中・戦後も明日をみつめて

高山市本母町 井端 巖

学校を卒業すると国鉄に奉職し、高山駅で検車区注14に勤めた。

昭和十九年徴兵検査が済んで結果は「第一乙種合格」注15であった。その年十九年の冬か、遅くとも二十年の三月か四月に、現役入隊と決まった。

年次有給休暇が毎年たまって二十日ほどあった。十月、秋の取り入れをすませて「年休」をもらって東京見物に行った。「兵隊にとられたら、東京も見ずに死ぬかもしれん。それはいかにも残念や」と思って東京見物に行った。

昭和十九年十二月五日、岐阜68連隊高井隊に入隊した。中隊本部の在る所は「堯渡街（ギョウトガイ）」と云って、漢口に向って左側に秋穂川を二十里程遡った所にある教会も学校もある中くらいの街だった。粗末な武器を支給されこれが日本軍なのかと心細

く思った。翌年八月十五日に戦争に負けたと知らされ、九月一日に武装解除を受けた。

九月十五日頃、我が平岡隊は勇猛の聞こえが高かったため、蒋介石軍からの命令で、武器を貸与されて陣地の警備につくことになった。蒋介石軍だけでは守りきれないので、一部を日本軍に請け負わせたものだ。

いつ帰れるかわからず、蒋介石の命令で揚子江の護岸工事に、毎日毎日駆り出され、<sup>注16</sup>モッコ担ぎの連続だった。その年も明けた昭和二十一年も二月になると復員の話が出るようになった。武装解除を受けてからもう半年近く経っていた。毎日のモッコ担ぎで肩は腫れてパンパンである。日本に帰る事は出来ないのではないかと、だんだん絶望感が大きくなった。だが、とうとうその日が来た。四月、前日まで判らなかつたが、朝食後「本日十時に出発して、飯田棧橋から乗船する」と伝言があつた。

上海港の飯田棧橋から米軍の上陸用船艇に乗った。すごく速かつたが、その分船酔いも酷かつた。長崎港に上陸し、そこからは鉄道を乗り継いで帰れと言われた。まず大阪まで、そこから名古屋まで、そして岐阜駅にやっとたどり着いた。岐阜駅で鉄道電話を

借りて高山駅に電話をした。私よりも先に兵隊に行った相原さんがすでに復員されていて、電話口に出られた。

「もしもし、検車区ですか。井端です。今、岐阜まで帰ってきました。今夜七時頃の汽車で帰ると、家へ連絡お願いします」

「そうか、井端君か。ご苦労様。分かった分かった。連絡しとくで、元気で帰ってこいよ」  
「ありがとう、頼むぜな」

飛騨金山駅まで、柴田君と榎君が迎えにきてくれた。

「おう、よかったな、ご苦労様」

「えかった、えかった」

高山駅からは歩いて家に帰った。色々話をしながら帰ったが、途中のことは覚えていない。家まで、三キロの道程を柴田君が背注17のうを背負ってくれた。遠慮したが、とうとう家まで背負って歩いてくれた。

家では父が囲炉裏の横座に座って、火を燃やして暖かくして待っていてくれた。父の

左に柴田君、右に私が座って、

「今帰ってきたわいな」

「おう、ご苦労じやったな。検車区から知らせてもらった」

「みんな、まめやったかな」

「うん、よかった、よかった・・・」

と、父が云いながら俯いた。その顔を見たら、大きな涙がぼろ、ぼろ、ぼろと続けて流れ落ちた。私も柴田君も無言のままだった。

私は生まれて初めて父の涙を見た。母の葬式にも涙を見せなかった父。私の留守中本当に淋しかったのだなと思い、私も涙が出た。囲炉裏の網デッキの上に、干した鰯が三、四匹、焼いてあった。その鰯を眺めて涙をこらえた。この時生きて帰れたことが、しみじみと嬉しかった。今でも鰯を焼くとき、必ず父の涙顔を思い出す。ほろ苦い涙。

「良かった」

「ありがたい」

再び国鉄高山駅に復職した。戦後高山駅職員を中心にみつばち座という演劇研究会が創立されていた。私は昭和二十一年四月に復員し、十二月にみつばち座の仲間に入った。喜多座で演芸会が催され、八木隆一郎作の「故郷の声」「湖の娘」などを上演した。

昭和二十二年、国鉄労働組合が主催した演劇コンクールに参加した。地方本部ごとに行なう予選には、高原清さんの自作台本「吹雪に挑む人々」を引っ提げて参加した。戦後の混乱した世相や食糧難など混迷した生活を吹雪ととらえ、吹雪に負けまいと真摯に生きる若者の姿を描いたものである。

名古屋地方大会で優勝し、中部地方大会でも優勝して、いよいよ東京で行なわれる全国大会に参加である。上野公園の不忍池畔にあった都民文化会館で、全国大会が三日間にわたって開催された。「吹雪に挑む人々」は千田是也、伊藤喜朔、岸田今日子、久保田万太郎、山本安英らの審査委員の絶賛を頂いた。それは脚本も良かったし、演技者も素人で、初々しかったのが受けたのだらう。

その頃、国鉄の慰安会では職場ごとに寸劇を競演したり、村の祭礼では余興に芝居を

やったり、どこでも演劇が盛んだった。みつばち座も昭和二十二年から二十六年までが一番盛んに活躍した時期である。二十六年になると、国鉄職員の殆どが斐太高校の定時制に入学し、私も劇団仲間も入学したために稽古が出来なくなり、みつばち座演劇研究会は休みになった。